日本
ハンザキ研究所ニュース 2011(8)：通巻No.68

発行２０１１年８月３１日
〒６７９－３３４１兵庫県朝来市生野町黒川２９２
Tel／Fax:０７９－６７９－２９３９
E-mail：info@hanzaki.net
URL：http://www.hanzaki.net
NPO法人　日本ハンザキ研究所　栃本 武良

木彫りのハンザキ

ハンザキの民俗資料⑤

木彫を趣味にされている人は意外に多いようだ。ハンザキ研への入り口にあるハンザキ橋の渡り口には“大ハンザキ”２匹が出迎えている（写真９）。これは元黒川区長の竹村勲さんの大作である。世界最大の大ハンザキをという無茶なお願いをしたが、クリの大木の枯れた物を見つけたと言うことで実現した。もう１匹はキリの木だが、これも硬い材質を削っての力作である。以前にも県豊岡土木の職員の方から大小２個体の木彫ハンザキを頂いているので、この機会に紹介しましょう（写真７）。

ハンザキ・グッズを数多く排出している“いくの銀谷工房”が活動する「まちづくり工房井筒屋」の入り口にも河川の石を配した木彫の可愛いハンザキが２体出迎えてくれる。（写真８）これは朝来市役所の大垣消防士の作品だそうである。

大垣さんの作品

ある日、ハンザキ研に大垣さんが突然現れて、木彫りのハンザキをプレゼントしてくれることになった。それは、私が銀谷工房のハンザキをほしいと言ったことが伝えられたためで、ハンザキ研がどんな所なのかを見学にこられたようだった。それから何年が過ぎたか忘れかけていた頃に、上の写真のような傑作が届けられたのである。

丸められた尾の中央から釣竿が伸びてミミズ（○）が付けられている。両脇にはアマゴが２匹餌を狙っている。岩組みは県の天然記念物“栃本の溶岩瘤”のある豊岡市日高町神鍋の溶岩を使い崩れぬように金属棒で組み込んであり、その岩穴からハンザキが顔を出している所である。小さな餌ミミズからハンザキに至るまで細やかな鑿の使い方だ。もっともハンザキは魚を捕まえるのは下手ですので、１年に１㌢も成長するのは稀なのです。

ハンザキの民俗資料⑥

ヘルベンダー（アメリカ・オオサンショウウオ）グッズの色々

米国では２年ごとに“ヘルベンダー・シンポジウム”が開催されているそうだ。今回、シンポジウムに参加した当法人の会員であるティムさんから沢山のプレゼントを頂いた。実は、今までにもレプリカ（教材用）など多くのハンザキ・グッズを頂いているのだが、今回は意外なポスター（写真１）があった。それはなんということであろうか！多くの人々が勢ぞろいして鋤を持ってヘルベンダー退治をしたと言う物だ。突き殺されたヘルベンダーの数々や切り刻まれている様子など驚くべき光景である。無論、現在のことではなく、魚類を食う悪者と見られた時代があったということである。今や、最大記録の 74㌢どころか、全長が 50㌢を超える物は稀になってしまい懸命に保護に努めているそうである。ティムさんは、弁護の解説を付けて展示してほしいと念を押していたが、解説が無くともそんな馬鹿なことを今も続けていると思う人はいないだろう。

Ｔシャツが５点（写真２）も揃った。いずれも売り上げをヘルベンダー保護に使うのだそうである。昨年にハンザキ研にやって来た３人の米人からの託でもあったらしい。その他にも帽子やシンポジウムのポスターも頂いたが、ヘルベンダー・グッズのコーナーが必要になりそうだ。日本のハンザキのグッズは、年々増加の一途をたどっており、軽く 200 点を越えて部屋そのものが狭くなってしまった。

・・

ハンザキの里帰り　②

市川水系生野ダム下流の河川工事が終了して、６月に先遣隊の 40 個体が古巣の川へ戻されました。古巣とは言っても工事が行われると大変な様変わりになってしまいますので、本当に落ち着いてくれるのかどうか心配なことです。私たちは今現在で考えることのできる範囲の対策提案は行いました。しかし、机の上で考えたことが実際の自然環境の下で役に立ったかどうかは追跡調査をしてみなくては分からないことです。ですからこれからの、追跡調査に注目しなくてはならないと考えています。

6 月には、地元の生野小学校生の手で放流をしてもらいました。地域の将来を担う人材です。今回は、地域の住民の皆さんに声を掛けて参加していただきました。生き物や自然環境の保護保全は地元の方々に理解していただかなくては成り立ちません。そのためにもできるだけ多くの方々に参加をしていただくことが大切になります。当日は、合併前の生野町当時の助役や町会議員を勤めた方の顔が見えて大変に嬉しく思いました。その中でも、元気な年配のお母さん（写真 12）の張り切り方には感激しました。

残されたハンザキは傷病個体３匹と幼生８個体です。傷が治れば原状復帰させる予定です。幼生は、マイクロチップを挿入することができるサイズにまで育てて、生まれた年がはっきりしている個体の放流から寿命などの解明ができることを期待しています。

写真 1　ヘルベンダー駆除のポスター

写真 2　ヘルベンダーのグッズ類

写真 3　地域の役員方の草刈、枯れ木の伐採作業

写真 4　緊急保護された下顎骨折個体

写真 5　ハンザキ・ネブタ

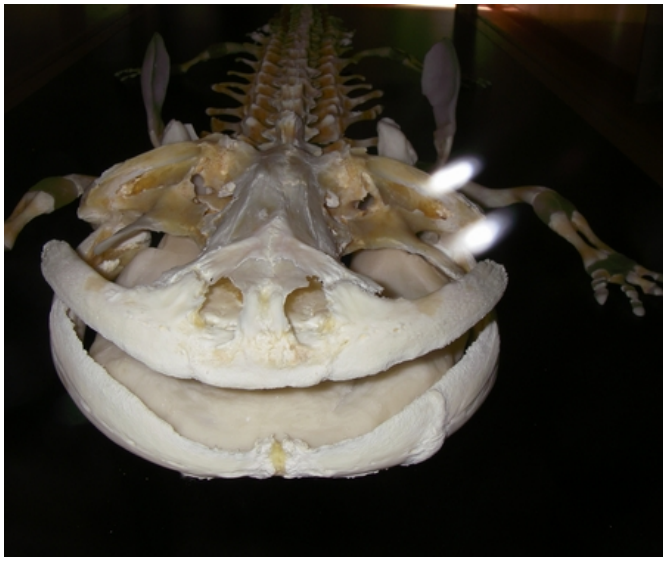

写真 6　リュウちゃんの骨格

写真 7　豊岡土木職員の作品

写真 8　「井筒屋」入り口の大垣ハンザキ

写真 9　ハンザキ研入り口の大ハンザキ

写真 10　県立大生の看板取付け作業

写真 11　市長さんの視察

写真 12　ハンザキの第２回放流

下顎骨折のハンザキ救出

夏休み真っ盛りの 13 日､若いお兄さんがハンザキ研に血相を変えて飛び込んできました。口に大怪我をしたハンザキがいたので見に来てほしいと言うことです。場所は５㌔ほど下流の魚ケ滝であるという。大勢の観光客が水遊びに集う所である。毎年のように観光客にいたずらされることがある場所で、夏には調査をしたくない水域である。プラケースを抱えて車に乗せてもらって、現場へ行く。また送っていかなくてはならないのかと少々いやな顔も見せられたがお願いした。現場では、支流が流れ込む淵に納まっていたハンザキがすぐに確保できた。よく見ると、下顎の骨の一部が外に出てぶら下がっている（写真４）。何でこんなことになるのだろうか？上顎は頭骨と繋がっていて頑丈にできている。それに反して下顎は人間も同様であるが左右から弓状に細い骨があるだけなのだ。

何年前になるだろうか、大阪府茨木市から交通事故で死んだ？というハンザキの死体を送ってもらったことがあった。水中生活者のハンザキが車に轢かれることはまずありえない。原因は、下顎の骨が折られて無くなっていた事で、釣り人とのトラブルが考えられた。今回も、同じことではなかったかと考えられる。この個体はマイクロチップから 19 年間追跡中のハンザキであることが確認できた。連絡してくれたお兄さんたちには本当に感謝するばかりである。一般の方々がこのように関心を持ってくれることがハンザキ保護の最大の力になるのである。私は感謝の気持ちをこめてハンザキ研の案内をした。意外な成り行きに、彼らも感激してくれていたようである。

・・

カモガワ・ハンザキの隔離作戦開始

何年か前から京都の賀茂川に変なハンザキがいると言う噂があった。京大・松井研が調査に入り、ＤＮＡ鑑定をすると 90%以上がハイブリッド（日本のハンザキと中国産種との交雑個体）と言うことが分かった。日本産の純血種が数%しか確認できないと言う恐ろしい結果が出て、京都市教育委員会が本年度から実情調査を実施することになった。とりあえず京都市内の水域の徹底調査が行われることになり、次々とハンザキ研に収容されている。５月に開催された対策委員会では、どのくらいまで収容できるのかという質問があった。現在、ハンザキ研の児童用プールを 10 区画に仕切ってその 1 区画に 100 個体近くを収容しているので、計算上は 1,000 個体かと答えたが、その数を超えていく場合には殺処分が待っていることになる。

7 月 2 日 8 個体、18 日 19 個体、8 月 1 日 2 個体、17 日 9 個体、31 日 3 個体という状況で、2005 年の 6 個体から始まってあっという間に 147 個体（内 13 個体は死亡）と言う状況になった。全長が 20～130 ㌢という幅があり共食いの可能性は十分にある。それは、直接手を下さないで済むから幸いなことなのかも知れないが、飼育管理する立場からは何ともいえないことである。色々な水系に出現しているようだと大変なことだ。

地域の皆さんによる草刈ボランティア

毎年のことですが、８月の一日を構内の草刈のために地域の役員の皆さんが参加して雑草の刈り取りを実施します。平成４年３月に閉校となった後は、西宮の夙川学園が夏のゼミナールに利用していたそうである。平成７年の兵庫県南部震災によって夙川学園の本部も被災して黒川キャンパスは撤退することになったそうです。バーベキュー場などかなりの設備投資をされた跡が残されていてもったいないことです。

校庭や土手の植物はシカなどの動物が侵入することが無ければ、うっそうとした植物相を作り上げることでしょう。しかし、地域の皆さんにとっては心の拠り所である学校が草に埋もれることは忍びない所だと思います。ただ、農業を主な仕事としている皆さんにとしては、作物以外は邪魔な有害な植物と言うことになってしまいます。アケビを始めとしたツル植物などは刈り取っても刈り取っても生えてくる天敵的な植物でしょう。

私は“叢屋”という言葉が大好きな人間です。色々な多種多様な草木に囲まれた環境なんて素晴らしい憧れの天地です。草刈りが終わった後はゴルフ場のような無味乾燥な姿になってしまいます。２年目からは、校舎の裏側だけは草刈をしないで下さいとお願いしました。その結果は、ヤマジノホトトギスやササユリ、エビネ、ホタルブクロ（白花）などの珍しい草花やフキ、サンショウなどの恵みを受けることができ、喜んでいます。しかし、地域の皆様は奇麗さっぱりと草を刈り取ってしまいたいようです。このギャップはいかんともしがたいところですが、少しずつ分かっていただける物と期待しているところです。

周囲を見回してみると、増えすぎたシカによる食害が目立ちます。作物の方は電気柵やネットなどで護られています。しかし、落葉広葉樹林の林床には緑が見当たりません。食える草はシカによって食い尽くされているのです。ササなんて普通のというよりも“笹薮”と呼ばれて嫌われ者の存在だったと思います。辺りを見回すと、満足な葉を持ったササなんて見当たりません。正月飾りの“クマザサ”取りの業者の姿もなくなってしまいました。春の味覚の一つである“クサモチ”のヨモギだって満足な物を探すのに苦労することになりました。何の変哲も無い雑草と呼ばれてしまうような草たちですが、無くなってからでは遅いのです。

私は、せめて校庭内だけにでも昔からの地域の植物相を維持して行きたいと考えています。校庭に接する川の土手は、昔はササユリの群落があったそうです。今や、残されたササユリは動物たちにだけでなく、“やまあらし”と呼ばれる“ヒト”たちによっても絶滅の危機に立たされています。山野草ブーム、山菜ブーム、野生のランなど日本の野生の植物たちは風前の灯状態になっているのです。校庭内に囲い込んでの植物園的な形でしかこれらの植物を残せないのは残念なことです。これらの野生植物は「やはり野に置け・・・」と言われるように雑多な植物の中でこそ輝いているのです。カワラナデシコは可憐な花を楽しませてくれますが、他のたくましい雑草にもたれかかって存在を示します。小さなネジバナの群落も校庭では見ることができます。皆さんも是非一考してください。

はんざき祭り 50 周年

岡山県真庭市の湯原温泉は有名な観光地である。ここでは毎年８月８日に“はんざき祭り”を開催している。はんざき柄のユカタで２体の大きなハンザキの山車を引いて回るだけのことだが街をあげての一大イベントになっている。今年は第 50 回目と言うことで大きなネブタのハンザキ（写真５）が加わって賑やかだった。このネブタは今年限りの運命になるかもしれないと言う話であったが、夜の闇に浮かぶネブタ・ハンザキはあでやかで今後も続けたらいいと思う。

昨年に引き続いて空き店舗を借りて出展したが、月曜日と言うことでか少し出足が鈍かったようだが、８月８日にこだわってのお祭りなので仕方ないようだ。私も 50 回を記念した法被を着せられて地域のケーブルテレビに出演させられた。まあ、少しでも多くの方にハンザキのことを知ってもらうことが保護に繋がることになり、湯原が近代的なハンザキの研究発祥の地であることやハンザキ研の活動、日本オオサンショウウオの会のことなどをＰＲさせていただいた。

湯原ハンザキセンターで飼育されていた中国オオサンショウウオの“リュウ”ちゃんは全長 160 ｾﾝﾁという大物であったが昨年死亡してしまい、この度剥製と骨格標本として登場することになった。生前の面影は全く無く、剥製の難しさが感じられたが、骨格（写真６）は堂々として立派であった。“龍頭ケ淵”の大ハンザキの伝説からの命名だそうである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ハンザキ所長のツブヤ記録

あっという間に夏休みが終わった。と言っても私に休みがあるわけではない。かえって忙しくなるシーズンだ。子供の頃の私にとって夏休みは忙しいけれど天国であった。毎日毎日飽きもせずに虫取りや魚すくいに明け暮れていたのだった。今や、孫たちがやって来て毎日川に入って魚取りをしている姿を見ると一寸前の自分の事のように思える。子供の頃に自然に親しむことは大切だと思う。そんな体験が無ければ自然環境がどのように悪くなっていても気づくことは無いだろう。今年もトラブルも無く１週間ほどの自然を満喫して大阪へ帰っていった。無事に帰ってくれたことには一安心だ。自然が豊かということは危険も一杯あるということなのだ。

今年は兵庫県但馬県民局の石井局長に続いて朝来市の多次市長の視察（写真 11）があった。お二人共に忙しい公務の間を縫っての急な来所であったが、ハンザキ研の活動に強い関心を持っておられるようだった。子供たちや多くの都会人への環境学習の拠点としての整備をお願いした。生野名物の“ダンジ”の料理は他に見られないもので、土手のスカンポが原料である。和名はイタドリであるが、実は昔の名前は“タジ”なのだそうである。タジがなまってダンジになったのだと思うが、“スカンポ”市長として他地域に無いユニークなダンジ料理とハンザキ研を郷土の誇りとして全国区にしてほしいものです。

ハンザキ研日誌　　２０１１年８月

１日　・岡山の自然を学ぶ会・藤本義博幹事他８名視察に
　　・兵庫県立大附属高校田村教諭と生徒３名見学に
２日　カモガワ・ハンザキ２個体搬入（兵庫県自然保護協会）
４日　・オオサンショウウオ健康診断（岡田副理事長他）、最終回
　　・兵庫県養父土木事務所から５名視察
　　・日本海新聞の山本記者取材
　　・簾野の人工巣穴オス不在となる（岡田副理事長調査）
５日　黒主、久し振りにアンコ淵の巣穴から姿を見せる
７日　・地域の方 11 名による構内の草刈、枯れ木の伐採
　　・事務局会議、８名
８日　岡山県湯原温泉の“はんざき祭り”昨年に続き出展、７名
１０日　・ランデスの野村氏等来所
　　・ソフトバンクの電柱移設作業、一日がかりであった
１１日　猪の子谷の水源配管破損、伐採木による
１２日　カモガワ・ハンザキ９個体搬入
１３日　・大阪府栗栖氏（天王プロジェクト）来所
　　・下顎骨折のハンザキ保護、19 年追跡中の個体（写真 4）
１７日　猪の子谷の水源配管修理
１８日　・簾野地区の人工巣穴№3 にオス個体（№1,100）あり
　　・会員の大垣氏より木彫りのハンザキ受贈（表紙写真）
１９日　朝来市と黒川区と会議、管理問題について
２１日　兵庫陸水生物研究会 11 名視察に
２２日　・市川・竹原野地区へ残りのハンザキ４３個体放流（残りは負傷個体 3 と幼生 8）
　　・県立神戸高校・稲葉浩介先生他見学に
２３日　特別老人ホームの喜楽苑から 11 名見学に
２４日　・朝来市長一行６名視察に
　　・三重県・日生学園３年の水谷君、大学入試小論文作成のために来所
２５日　龍谷大学・菊池教授、環境ソリューション工学科の学生 20 名と見学に
２７日　・アフリカ料理・バーベキュー（31 名参加）
　　・オオサンショウウオの夜間観察会 56 名（ウエスコ笹田講師他）、６個体測定
　　・兵庫県立大学三宅研究室の学生５名実習
　　・カモガワ・ハンザキ 11 個体搬入（合計 144 個体目、内 13 死亡）
２８日　県立大生、昨日に続いて構内の案内看板整備
３１日　カモガワ・ハンザキ３個体搬入（合計 147 個体目、内 13 個体死亡）